

平成20年度「専修学校を活用した再チャレンジ支援推進事業」成果報告書

事業名	再チャレンジを目指す若者たちのための メタボ対策健康指導者養成講座		
法人名	学校法人 三幸学園		
学校名	福岡リゾート&スポーツ専門学校		
代表者	理事長 鳥居秀光	担当者 連絡先	正木 光國 TEL 092-737-6375

1. 事業の概要

平成20年4月から「特定健診・特定保健指導」がスタートし、企業や自治体などに対して、40歳以上の人を対象に特定健診に基づく特定保健指導の実施が義務付けられたことで、多くの市町村や企業などで、様々な健康づくりのための運動プログラムが模索、実施されているが、その運動支援・指導を行う専門家の必要性・期待が高まっている。

本事業では、離・休職者の健康指導分野への再チャレンジを実現するために、今後展開される本格的な生活習慣病対策、特定健診・特定保健指導において、健康づくりのための運動・身体活動支援・指導を担う人材の養成を到達目標とした研修プログラムを構築したいと考えた。

自発的な健康行動やスポーツ行動を促すためには、日常生活の「楽しみ」と強く関連した指導が必要である。そのためには当然「運動」や「スポーツ」「健康」に関する核になる知識や指導力は基本的な能力として求められる。さらに、より効果的な実施のためには、「ホスピタリティ」「ユーモア」「明るさ」「楽しさ」を表現できる資質と能力を兼ね備えた人材が必要であり、その育成が本事業の大きな目標である。

また、近年特に「高齢者」の運動・スポーツ・レクリエーションについて注目されていることを受け、高齢者・障害者に各種サービスを提供する際に必要とされる介助の技術を習得する「サービスクア専門士」の資格取得プログラムを盛り込み、高齢者にとって運動継続の鍵となる、「安全な運動指導」をより効果的に行えるようになるよう工夫した。

2. 事業の評価に関する項目

① 目的・重点事項の達成状況

大学等で専門的知識を習得したけれども職に就くことができない者や就職後短期間で離職した者、運動指導の分野に興味があるが技術・知識がないため就転職できずにいる者、こうした者たちにもう一度職業教育を行うことを目的として今回の委託事業においてプログラムを作成し、募集活動、プログラムの実施を行った。

当初想定した受講者像と実際の受講者にかかなりの差異が見受けられたが、今回の実施にあたってカリキュラムなどを実際に集まった受講者に対してより適切になるよう途中調整したことにより、結果としては、受講生のアンケートの評価を見る限りでは、内容に関しては満足のものも提供できたと感じている。

(満足:52%、やや満足:44%)

しかしながら、本来のプロジェクトの目的である余儀なく離職をしてしまった者の再就職の支援となるかについては検証するに至らなかった。

② 事業により得られた成果

構築した総時間数144時間の研修プログラムの内容は次のようなものである。(カッコ内は時間数)

- オリエンテーション(講義:3)
- 健康指導者養成
 - 概論(講義:3)
 - 運動にかかわる生理学
 - ・生理学-運動・体力-(講義:12)
 - ・特定健康指導における運動支援(講義:12)

- 栄養学
 - ・栄養学(講義:12)
 - ・食事についてのアドバイス(講義:6)
- 有酸素運動・無酸素運動(講義:3 / 実技:6)
- 運動指導の実践と応用
 - ・運動指導の実践と応用(講義:6 / 実技:6)
 - ・エアロビックダンス(講義:1.5 / 実技:3)
 - ・水泳・水中運動(講義:1.5 / 実技:3)
 - ・ウォーキング(講義:3 / 実技:3)
- 応急処置(講義:3 / 実技:3)
- まとめ講座(講義:3)
- サービスケア専門士
 - 概論(講義:3)
 - 高齢者の理解(講義:2 / 実技:4)
 - 障害の理解(講義:1 / 実技:2)
 - 具体的介助方法(講義4 / 実技:8)
 - 関連法制度(講義:6)
 - 事故のリスクマネジメント(講義:1 / 実技:2)
 - まとめ講座(講義:3)
 - サービスケア専門士検定試験(試験:3)
- キャリアカウンセリング(講義:12)

③今後の活用

今回の受講者募集にあたって相当数の応募があり、健康指導分野への興味・関心が高いことをふまえて、広く一般の対象に向けた関連講座の展開が考えられる。だが、今回の実施は受講料が無料である点を考慮すると、今後の有料講座の実施を検討する際には、受講対象者の策定や募集形態、実施形態などの課題を解決する必要がある。

「サービス介助士」は、人と接するあらゆる業種・職種で今後ますます必要となるスキル・マインドであり、今後本校で取り組む専門教育をはじめ、当学校法人内の医療福祉系の専門学校や社会人向け各種特別講座などに活用することで、普及に努めていきたい。

④次年度以降における課題・展開

今回、受講者募集にあたっては、卒業生へのDMや広告媒体で行ったが、一般に広く募集したことで志向にばらつきがあり、それに伴い受講者の年齢・経歴も当初想定したものと異なる部分が大きかった。

当初想定した受講者像と実際に健康指導に興味を持つ対象(例えば今回の受講者)にギャップがあることが分かり、今回の実施にあたってカリキュラムなどを実際に集まった受講者に対してより適切になるよう途中調整したが、より実情に即したカリキュラム内容を再考する必要がある。

だが、受講生の満足度を見ると、カリキュラムなどを今回実際に集まった受講者に対してより適切になるよう途中調整したこともあり、概ね内容に関する満足度は高かった。一方で意識の高い受講者においては、もっと専門的に突っ込んだ内容を希望する意見 ※ もあった。

※の例:実際の仕事や就職を考えるともっと専門的なものが必要なようにも思い、もう少し深いところまで扱ってくれたらもっとよかった。等

3. 事業の実施に関する項目

①履修証明書等

- ・講座時間数:144時間
- ・受講者数:25名
- ・修了証発行者数:25名

②カリキュラムの内容

- ・テーマ：「再チャレンジを目指す若者たちのためのメタボ対策健康指導者養成講座」
離職者・求職者等に対して、運動指導に係る知識技術等の養成指導を行い、離・休職者の健康指導分野への再チャレンジへ結びつける。
- ・開発経緯：平成20年4月から「特定健診・特定保健指導」がスタートし、企業や自治体などに対して、40歳以上の人を対象に特定健診に基づく特定保健指導の実施が義務付けられたが、その運動支援・指導の担い手となる人材の確保に苦慮している現状に応え、急務となっている健康指導・運動指導を行う人材の育成のための教育事業として開発を試みた。
- ・対象：①大学等で専門的知識を習得したが就職できずにいる者や就職後短期間で離職した者
②技術・知識はないが運動指導の分野に興味があり、再就職やキャリアアップを目指す者
- ・手法：講義及び実技を中心としたプログラムとし、受講者が実感、体感しやすい手法を採用。特に実技ではロールプレイング的要素を取り入れ、指導者役/指導される役を交互に行いながら、より実際の指導のイメージを体感しやすい工夫を重視した。
- ・開発内容：健康指導者養成（90時間）、サービスケア専門士養成（39時間）
キャリアカウンセリング（12時間）、その他（3時間）

③講座の実施

- テーマ：離職者・求職者等に対して、運動指導に係る知識技術等の養成指導を行い、離・休職者の健康指導分野への再チャレンジへ結びつける。
- 実施期間：平成20年8月18日（月）～10月17日（金） 24日間 144時間
- 場所：福岡リゾート&スポーツ専門学校校舎、及び生涯学習事業部教室
- 受講者数：25名
- 受講者の属性
年齢：20代:6名、30代:7名、40代:9名、50代:3名
性別：男性:6名、女性:19名
- 応募・受講状況
問合せ数：101件
応募者数：71名（当日キャンセル等20名）
受講者数：25名
修了者数：25名
- 受講者の反応
・アンケート結果内容からは概ね満足度は高かったと推察される。
（満足：52%、やや満足：44%）
・講義よりも参加型・実技中心型の講義科目の評価が高かった。
（有酸素運動・無酸素運動：36%
エアロビックダンス：44%
ウォーキング：48%
具体的介助方法：36% ※複数回答方式）
・講義内容の理解については、ほとんどの受講者（約90%）が「（よく）理解できた」と回答しており、講義の習得効果はかなり高かったと思われる。

④支援対象者(受講者)の状況

開講当初に実施したアンケートから推測すると、受講の理由として「就職のため」が44%と最多ではあるものの、大多数とまでは言い難く、「興味があった(28%)」、「自己啓発(20%)」も比較的多かったことから、受講者層として就職を第一とまでは考えていなかった傾向が読み取れる。これは1つは募集方法に依るところと、運動・スポーツという分野に対するイメージ的な側面があると思われる。

修了後の12月に就職・活動状況のヒアリングを行った際の回答として、「活動中」が32%、「情報収集程度」が20%にとどまってしまったことにも繋がっているようである。

上記に加え、健康指導分野については、やはり専門性が高く問われる業界だけに、「再チャレンジ(就職)」という目的からみると、大変厳しい結果となってしまった。本カリキュラムでは、初心者→基礎レベルの習得は十分に達成できたと思われるので、今回の結果をふまえ、現実的に就職に結び付けられる事業として、講義内容のレベルアップ、受講者募集の方向性を検討していく必要を感じた。